昭和女子大学近代文化研究所紀要　No. 19　39～42（2024・2）

近代文化研究所　第３回　公開シンポジウム

「ヤマトタケル―敗者の形象―」

開催日時：2023 年 8 月 5 日（土）13：30～16：00
開催場所：昭和女子大学コスモスホール

ヤマトタケル像作画：早川　陽
ポスターデザイン：株式会社コンセプトデザインラボ

＜プログラム＞
13：00　開場
13：30　開会　挨拶　趣旨説明　登壇者紹介
13：35　シンポジウムの論点
　　須永　哲矢（昭和女子大学准教授）
13：45　報告１　大御葬歌―哀惜と畏怖―
　　烏谷　知子（昭和女子大学教授）
14：05　報告２　神への「言向け」
　　松田　浩（フェリス女学院大学教授）
14：25　報告３　近代のヤマトタケル像
　　三浦　佑之（千葉大学名誉教授）
14：45　総括　ヤマトタケル伝承の言葉　須永　哲矢
14：55　休憩
15：15　パネリスト意見交換
15：35　質疑応答
15：55　閉会挨拶
16：00　閉会

シンポジウム開催の趣旨

ヤマトタケルは様々な観点からアプローチが可能であり、絵画、歌舞伎などの芸術、近代文学などの多くの作品の題材となってきた。その素材の源流は、日本最古の古典『古事記』にあり、光輝と陰影に富む物語は享受者のヤマトタケル像を造形しうるのである。近代文化研究所では、『ブックレット　近代文化研究叢書 16『古事記』にみる敗者の形象』刊行を契機とし、シンポジウムを企画し、パネリストと参加者に議論の場を提供し、ヤマトタケル像に迫りたい。今なお日本人の心に根ざすヤマトタケルの魅力について、それが奈辺に位置するのか掘り下げる。

ヤマトタケルは景行天皇の命により西征東征に尽瘁し、天皇家の版図を画定するが、伊服岐能山の神に言挙げをして散々に打ちのめされ、彷徨の末に能煩野で亡くなる。圧倒的な力を有したが故に、父帝に「建く荒き情」を恐れられ、荒ぶる神やまつろわぬ人等を平定する名目で都から追放される。西征はたった一人で敵地に乗り込む。少女と見まごう美しさに熊曽建兄弟は心をとろかし、油断した隙を突かれ倒される。景行天皇の威光を背負って誇らしげに名乗りを上げたヤマトヲグナは、さらに東征を命じられ父帝が自分の死を望んでいることに気付く。西征の華々しさは一転し、絶対的な父帝との葛藤や、住み慣れた倭を追放され流離を余儀なくされた孤独な主人公像が形成される。走水で愛する弟橘比売を失う苦難に遇っても、ヤマトタケルは己に課せられた役割を放棄せず、力の限り戦うのである。体制から疎外された敗者こそ、時代を超えて人間の心に生き残る様々な要素を兼ね備えている。

本シンポジウムでは、近代文化研究所の烏谷知子は「大御葬歌」を中心に、フェリス女学院大学教授松田浩氏に神への「言向け」を中心に、千葉大学名誉教授三浦佑之氏に近代国家が求めたヤマトタケル像について、それぞれの見解を述べてもらい、所員研究員の須永哲矢は国語教科書に採用されるヤマトタケル伝承を言葉からアプローチし、総括をする。太安万侶没後 1,300 年を迎えた今年、本シンポジウムが『古事記』に近づく新たな契機となり、ヤマトタケルについて今後の課題が提起されることを望む。

パネリストの報告要旨

報告１　昭和女子大学教授　烏谷　知子 「大御葬歌―哀惜と畏怖―」

烏谷　知子　氏

倭建命の薨去の場面には、「大御葬歌」とよばれる歌謡が載せられる。

34　なづきの田の　稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　野老蔓

35　浅小竹原　腰泥む　空は行かず　足よ行くな

36　海処行けば　腰泥む　大河原の　植ゑ草　海処は　いさよふ

37　浜つ千鳥　浜よは行かず　礒伝ふ

これら四首には、「なづきの田」「浅小竹原」「海」「礒」の場が詠み込まれる。また第34～36番には、「なづき」「なづむ」の語が、第35から37番には「行く」の語があり、四首の歌謡は連続性を有している。八尋白智鳥と化した倭建命の霊魂の道行と、それを難渋しながら追いかける后等や御子等の道行が語られ、命の魂は「天」に向かって飛び去る。ここには「葬」の「死者をこの世からあの世に放ち遣る」という言葉の意や、行き難さを歌う葬歌の表現様式を超えて、后たちや御子たちの悲哀や哀惜の情が浮かび上がる。平定に生涯を捧げ、二度と都に戻れず、即位しなかった皇子の葬送に天皇の大御葬歌の起源が結びつけられる。『日本書紀』には日本武尊への天皇の哀惜の念が描かれ、大御葬歌は載せられない。

倭建命と同様に、即位しなかった皇子の薨去は、持統十年（696）に詠まれた高市皇子尊殯宮挽歌の反歌に、「ひさかたの　天知らしぬる　君故に　日月も知らず　恋ひ渡るかも」（万葉集　巻二・200）と「天」が記される。『礼記』郊特牲第十一には、人が亡くなると「魂気帰于天、形魄帰于地」とあり、魂の気、精神機能の本質は天に帰るとある。また、『礼記』祭法　第二十三には「柴を泰壇に燔きて天を祭る」とあり、「天下を有つ者は百神を祭る」とされ、倭建命は「天」に上り祭られる者となっていく。『続日本紀』巻第二　文武天皇　大宝二年（702）八月条には、「癸卯、倭建命の墓に震す。使を遣して祭らしむ」とある。倭建命の墓に落雷があり、朝廷によって祭が行われる。

父帝に「建く荒き情を惶れ」られ、体制から疎外されながら、自らを犠牲にしてこの世からヤマト王権に敵対するものを祓う異端の英雄像は、悲壮かつ悲劇的に形象される。苦難の末に果たされた東征において、倭建命は放浪の末、異郷の地で傷つき病み衰えこの世に思いを残しながら最期を遂げる。大八島国平定に尽瘁し、自身も様々な負を負って死んでいった超越的存在に対する鎮魂がなされる。その報われなかった英雄の生涯を締めくくるのが「大御葬歌」である。「大御葬歌」に至る倭建命の道行は、一連の悲劇の誕生を物語るのである。

報告２　フェリス女学院大学教授　松田　浩 「神への「言向け」」

松田　浩　氏

『古事記』のヤマトタケルは「言向」を完成させる英雄として描かれる。「言向」は「平定」と訳されることが一般的だが、他の上代文献には見られない『古事記』特有の語である。『古事記』は、神話においてアマテラスの御子（天孫）による葦原中国統治が「言向」によって可能となったことを描き、それに保障されつつ、人代において天皇の治める「天下」の拡大・完成が「言向」で実現されたことを語る。そうした「言向」を完遂した存在として『古事記』のヤマトタケルは造形される。

ヤマトタケルの「言向」の発端となる西征は、ヤマトタケルが父・景行天皇の言葉を取り違えて兄を殺害したことに、天皇が「建く荒き情」を見出したことに始まる。「建」は「言向」を成し遂げる神・人に共通する能力であるが、「荒」は「言向」される側たる「荒ぶる神」の性質であり、「建」は武に関する強さを、「荒」は天皇の「言」の秩序から逸脱する性質を意味する。それを併せ持つヤマトタケルは、山・川などの人の秩序の及ばぬ自然世界を取り込み、人語の通じぬ荒ぶる世界を「言」の世界へと秩序化してゆく。それこそが「言向」の内実である。これを可能にするのが、ヤマトヒメを通して与えられた、「言」の神としてのアマテラスの加護である。その霊力の籠る草那芸剣を手放すとヤマトタケルは「言」の力を失い、伊

吹山の神の「言挙」に失敗して死に至る。ヤマトタケルの本性たる「建・荒」と「言」の力との力学の中で『古事記』における悲劇の英雄像が形象されたのである。

報告 3　千葉大学名誉教授　三浦　佑之 「近代のヤマトタケル像―日本武尊と倭建命」

三浦　佑之　氏

近代において、ヤマトタケルというヒーローは、絵画・教科書・絵本・小説・舞台など、さまざまな媒体に登場し、他の神話・伝承における主人公とともに、国民国家の形成に大きな役割を果たした。そして、そこで取りあげられるヤマトタケル像の多くは『日本書紀』の日本武尊をモデルにしており、『古事記』の倭建命が用いられることはあまりなかった。場合によっては両者は折衷され、文学的な彩りを与えるために『古事記』のエピソードが用いられるということもあるが、大筋ではやはり『日本書紀』の日本武尊という天皇に忠誠を尽くす皇子将軍のイメージが求められたのである。

報告では、具体的な資料として戦前に全国共通に用いられた国定教科書を取りあげ、そこに描かれたヤマトタケルのあり方を考えてみた。明治 36 年に出た第一期国定教科書（「尋常小学読本」「高等小学読本」）から、昭和 16 年に刊行された「よみかた」「初等国語」まで、五期にわたって改定が行われている（戦後に出た第六期は除く）。そのなかで、『古事記』に出てくる稲羽の「素菟」神話（教科書では「因幡の兎」「白ウサギ」「白兎」の表題が付く）とともに、ヤマトタケルは全期にわたって載録されている定番教材であるところからみて、この話がいかに重宝されていたかがわかるはずである。

その国定教科書の内容を見てみると、期によって「熊襲征伐」（「川上たける」）か「草薙剣（二）」のどちらかが用いられたり、その両方が取りあげられたりしているのだが、主人公の名前は「日本武尊」で統一され、細部の表記を確認しても、ほとんどの場面で『日本書紀』の用字や設定が踏襲されることになる。そうして当然、そこでは国土を統一した勇敢な少年英雄、天皇に忠誠を尽くす皇子というイメージで統一されており、『古事記』に窺えるような兄殺しにおける凶暴さや、父天皇との隔てられた関係が修復されないままの悲劇的な最期などはまったく取りあげられることがない。おそらく、そうした悲劇性が一般に強調されてくるのは、戦後になって浪漫的英雄像がもてはやされるようになってからのことと考えてよい。

近代国家のなかで、正史『日本書紀』に描かれた日本武尊が近代国家を下支えするために利用されるというのは、ある意味当然ともいえるあり方であったはずだ。それに対して、『古事記』における倭建命は、そうした役割を担うには、あまりにも過剰さが目立ちすぎる存在だったのだと思う。たとえば、友だちになったイヅモタケル（出雲建）をこっそり作っておいた木刀を佩かせて切り殺してしまったり、父天皇は自分を死ねと思っているのだと泣きながら訴えたりするヤマトタケルを、国定教科書に載せることなどできるわけがなかったのである。

そしてそこに、『古事記』と『日本書紀』との、本質的な差異が見いだせるはずである。わたしが、『日本書紀』は「正史」であるのに対して、『古事記』「序」は後付けで、元は国家や王権とは離れたところに存した「稗史（はいし）」であると主張しているのは、そういうことなのである。

総括　昭和女子大学准教授　須永　哲矢 「ヤマトタケル伝承の言葉」

須永　哲矢　氏

シンポジウムの論点予告を兼ねた導入として、現代の学校教科書（国語）に収録されるヤマトタケル伝承の在り方について報告した。ヤマトタケル伝承は西征と東征とでその趣が異なり、東征以降は悲劇性が高まるが、現代の国語教科書では主に東征以降、薨去に至る道行が採録されることが一般的となっている。そのことは近代の国語教科書の在り方とは大きく異なる可能性を指摘した。また、各教科書とも薨去の場面までで切ることはなく、その後まで描かれるため大御葬歌までが掲載されることも多いが、一部にとどまり、その箇所だけでそれが意味することを深く理解することはできない。また、ヤマトタケルが傷ついてゆく契機となる西征・東征にはその理由付けとして「言

向け」という点が外せないが、これは古事記特有の語であり、学校教科書に採録するにあたっては、一般的な古典単語ではないため必ず注釈が付く語である。「言向け」に対する各教科書の注釈を確認すると、それらは一様に「説得し服従させる」という解釈に止まっており、疑問が残る。以上を指摘し、報告 3 件に対する問題提起とした。報告 3 件ののちの話題提供として、上代においては「言」を含む複合語が豊富であり、その点において中古以降と様相が異なること、また、上代特有の「言～」という複合語には、言葉の持つ力の発動に関するものが多いことの指摘を準備していた。また、大葬歌の表現にも通ずる「なづく」「なづむ」という語に関しても、コーパスのデータを用い、上代から通時的な用例調査を行った。そこでは上代の「なづむ」が往来のうち、とくに「来」に傾斜し、思慕を伴ったうえでの困難な移動を表現する点が後の時代には見られなくなる特徴であることを確認した。報告後の話題提供の内容については、時間の都合もあり省略した部分もあるが、各報告を受け、解釈・理解の深化と多角性を確認したのち、ヤマトタケルの敗者性に焦点をあてての討議を提起した。

ディスカッション：左から　烏谷氏、 松田氏、 三浦氏、 須永氏

会場風景

※申し込み人数：119 名（内訳：オンライン 61 名・会場 58 名）
※当日参加人数：108 名（内訳：オンライン 58 名・会場 50 名）
※事後アンケート回答数：56 件　　満足度（満足＋やや満足）：96.4%